

ふたごの青春

小柳 渚
小柳 汀

主婦の友社

ふたごの青春

小柳 小柳

渚 汀

主婦の友社

★全国の書店での定期の購読をおすすめします。書店にご不便な場合は、本社まで振替でお申し込み願います。

★定期直接購読料(前金送料込み)は次のとおりです。

都内(23区のみ)	1 カ年	3300円
	6 カ月	1700円
地方(都下を含む)	1 カ年	3800円
	6 カ月	1950円

毎月17日発売

●新しいセンスの実用専門誌

別冊主婦の友——奇数月の25日発売

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店が本社へお申しいでください。

ふたごの青春

定価 三五〇円

昭和四十三年九月二十日 発行

著者 小柳 渚
小柳 汀

発行者 石川 数雄

印刷所 明善印刷株式会社
(カバ) 共同印刷株式会社

著者との了解により、
検印を廃止いたします

発行所 株式会社 主婦の友社

郵便番号一〇一
東京都千代田区椿田駿河台一の六
振替 東京 一八〇番
電話東京(24) 一一二一(大代表)

はじめに

日本の神話に登場する英雄ヤマトタケルノミコト（日本武尊）が、双生児の一人であったということを知っている人は少ない。

しかしこれは、神話上のことであつて、別に問題にはならないが、現実には、ザ・ピーナッツという女性歌手がいる。これならだれでも知っている。

彼女たちは、一卵性双生児である。

ところで実は、私たちも一卵性双生児である。彼女たちが一卵性の女同士なら、私たちは同じく一卵性の男同士である。さしずめ、ザ・ドーナツとでも言うのであろう。

では、この双生児とはいったい何なのであろうか？

ものの本によると、次のように定義されている。

『一回の分娩で二子が生まれるとき、これをへふたご、あるいは双生児と言う』

二人いっしょに生まれるから「ふたご」であり、「双生児」である。しごく当然のことである。そして、双生児には、一卵性と二卵性の二種類があるとのことである。

「一卵性双生児は、一個の卵子と一個の精子とが受精し、この受精卵の発育、分化する途中に、おそらく囊胚または原腸胚の時期に、今日なお不明の原因によって二個の個体に分かれ、その後独立して発育し、一産二子として生まれてくるものである。二個体に分かれる時期によって胎膜の状態が違っている。今日の遺伝学では、すべての人間は異なった遺伝質を持っていると

いわれるが、一卵性双生児だけは、同一の遺伝質を持つ唯一の二人であると考えられる」と、いうことであり、

「二卵性双生児は、二個の卵子と二個の精子が時を同じくして別個に受精し、初めから二個の独立した個体として発育、分娩されるもので、母体内の発育をともにした同胞（兄弟姉妹）と全く同じである」

以上のことが、一卵性と二卵性の区別であるが、一卵性双生児は常に同性であり、二卵性双生児は同性の場合もあり異性の場合もあるということである。

私たち双生児の発生の原因についても、学会においては、アダヴィズム（先祖帰り）説、変質説、中毒説の三種があるとのことであるが、いずれも確実な証明がなされたわけではないし、これだと信用するべきものはないようである。どれかを信用するとなれば、あえて双生児を卑下することになり、都合の悪い説ばかりである。

私たちは双生児の同胞が、これを打破し、新しい学説を立てて、同胞に優越感を持たせる日が必ず来ることを期待したい。

次に、双生児の分娩度数について調べてみると、私たちは平均して八〇から一〇〇回に一回の割合で生まれてきたことになる。これは病院、産院における度数であるが、助産婦の記録によると、一五〇から二〇〇回の普通分娩に対して一回の割合であり、数年前の日本の人口動態調査統計によると、三〇〇回に一回となっている。

諸外国の度数は日本より高く、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーの北欧に私たちの同

胞が特に多いことになっている。

仮に、日本において一〇〇回に分娩に一回双生児が生まれたとするならば、人口約一億のわが国には、二〇〇万の私たちと同じ双生児が各地に存在していることになる。実に偉大なる数である。

戦前では、地方的因習や偏見に悩まされて、双生児は動物の変身と言われたり、不義姦通の産物と言われたり、あるいは心中者の生まれかわりとして迫害されたので、生まれれば、すぐ一人は殺されるか、または捨てられ、さらには、別々に引き離されて育成されたりしたので、実際の数はかなり少ないかと思われる。

全国 of 双生児の中にも、地方的な因習に悩まされ、劣等感を抱いて生活をしている人々がいるかもしれない。

しかし、そんなことは、科学文明の今日において気にすることは毛頭ないと訴えたい。

現に私たち二人は、今日までむしろ双生児という立場に優越感を抱いて生活してきたし、一個の独立した人間として存在している。

私たちは、むしろ自分たち双生児を時代の生んだエリートではなからうかと、ずうずうしくも自負している。

その理由として、もし私たち双生児が存在しなかったら、人類の発展に貢献してきた人類学、生物学をはじめとする遺伝学、環境学、心理学、教育学等の諸科学の発達は、けっしてあり得なかったからである。

単生児の皆さんの言われるように、二人で一人前という逆説は成立するはずがなく、むしろ双生児は、全人類の運命を救済するに足る価値を持つ存在である。

単なる私たちの戯言ざれごとかもしれないが、とにかく私たちは、双生児の存在意義をお互いに究明し、使命感を確立してみたいと思っている。

以下、紹介する私たちの生活記録も、単なる双生児の生活記録という気持ちではなくて、双生児そのものを追求してゆきたいと思って綴った。

つたない生活記録に終わってしまったが、私たちはこれを機会に、他の双生児諸氏と連帯を持ち、もっともっと双生児について考えてゆきたいと思う。

そしてさらには、双生児の生活記録を結集して、初めて双生児を出産され、育児にとまどっておられる若い母親の皆さんへ、育児の参考書として、プレゼントしたいと思うのである。

双生児諸氏のご意見とご批判を心よりお待ちしております。

最後に、本書の出版に際し、激励をいただきました国立精神衛生研究所双生児研究班の池田先生、ツイン・マザーズ・クラブ（双生児の母親の会）幹事白川様、およびご尽力をいただきました主婦の友社のかたがたに心よりお礼を申し上げます。

昭和四十三年八月

小 柳 汀 渚
小 柳

目次

少年時代

はじめに	1*
プロローグ——母の話から(1)	10
なんでもいっしょ——母の話から(2)	11
戦争ごっこ	16
チン坊とター坊	19
大刀と小刀	24
模範生とガキ大将	29
双子座	33
シャム双生児	39
心霊術	45

青春時代

ウルトラC兄弟	52
養子の話	58
〔詩〕 ふたつ星に向かって67／ふたつ星68	

受験生と文学青年	70
初恋の人	77
修学旅行	84
社会への門出	89
動物電波開通	96
試験に耐えて	102
別離の握手	108
東京の渚	111
福岡の汀	115
安保闘争のころ	121
いとしき人	126
帰省列車の窓	134

青年時代

脱 皮……………	231	ふたつ星の夜……………	139
再び動物電波？……………	223	武蔵野エレジー……………	154
汀の上京……………	218	愛の終わり……………	164
動物園経営……………	215	落葉の舞……………	172
容姿音痴な恋人……………	207	〔詩〕 ふたつ星の夜(1) 175／ふたつ星の夜(2) 176	
代 役……………	202		
ライバル意識……………	198		
マチガエナイデクダサイ！……………	191		
星へのいざない……………	185		
春の夜の対話……………	178		

	手術の夜……………	235
	婚約指輪……………	244
	汀の結婚……………	248
〔詩〕	ふたつ星の歌 257／武蔵野エレジー（深大寺） 258	
〔写真〕	渚と汀のアルバム (1)……………	65
	渚と汀のアルバム (2)……………	179

少年時代

フロローグ

——母の話から(1)——

日中戦争の長期泥沼化から、やがて日、独、伊三国軍事同盟結成に至る不穏な空気の中で、
ともかくも渚と汀はうぶ声をあげた。

昭和十五年(一九四〇年)五月九日、福岡県の南部、筑後平野を貫流する清流、矢部川のほとり、山門郡瀬高町においてである。

午前十時、まず渚が元気な声を上げて生まれた。再び陣痛は起こり、十五分後に、汀が生まれた。渚の体重二・一六kg(580匁)、汀の体重二・〇六kg(550匁)、大きな単生児の約半分の体重で、二人とも、体が小さいため、出産は楽であった。

枕元には、二人分のうぶ着が、すでに用意されていた。二人をとり上げた助産婦は、以前から双生児と気づいていたが、母には出産の日までないしょにしていた。

それでも、「うぶ着を二枚用意しておいたほうがよろしいですよ」と冗談半分に言うので、母は三度目の出産であり、これまでと違う様子に、七カ月目ごろから双生児ではなからうかと感じていたのだ。

生まれた二人は、母の思案のたねだった。母乳は一人分は十分あったが、とてもそれだけでは足りないので、一週間目からは、ミルクと母乳を平等に与えた。

毎日、生牛乳を近所の牧場から五本もらって飲ませていたが、太平洋戦争突入前で生活事情

が急速に悪くなり、ミルクや砂糖も配給制になり、自由に手に入れることもできなくなった。そこで、幼児用のミルクを作っている会社に直接手紙を書いて、とり寄せたこともあった。砂糖も切符制で、一人分しか配給されなかったが、祖父が役場に交渉して二人分にふやしてもらい、かろうじて補給することができたのだった。

夜は全部、母乳を与え、別々に寢床をとり、時間をずらして交互に飲ませた。そのため母はほとんど眠ることもできず、まして日中は手を離すことすらできなかった。洗髪も長くやらないうちに髪はよごれてかさかさになり、火箸をさしても皮膚まで通らないほどになっていた。物資不足のおりで、衣料も切符制のため十分もらえず、母の着物をといて、二人分同じものを作って着せた。

灯火管制の夜などは、二人とも、泣きわめくので神経衰弱になりそうだった。

外出時は、母が汀を背負い、祖母が渚を背負って子もりをした。

一人が病気になる、必ずもう一人も病気になる、手当てにも多くの時間がかかった。

しかし、生後十カ月を過ぎるころには、二人とも、単生児の大きさになり、誕生日を迎えるとしっかりと歩けるようになっていた。

なんでもいっしょ

——母の話から(2)——

二人が三才になった冬の日、奇妙なことが起こった。七草正月を過ぎた寒い夜のこと、家

族の者は火鉢の回りに集まってだんらんを楽しんでいた。

母の膝の上には、しっかりと汀が抱かれ、おばあさんの膝の上ではいつものように渚が立ち上がって、しきりに舌の回らない声を発してはしゃぎ回っていた。

みんなも最初は、対象的な二人の姿を交互に見くらべていたが、しだいに、元氣な渚に目を向けて、笑いをさそう渚の動作に相づちを打ち、渚の相手をするようになっていた。

汀は依然としておとなしかった。母のぬくもりを楽しんでいるかのように、身動き一つするでなく、ときおり顔を上げて、母をのぞく程度であった。

渚はますます得意になってはしゃいでいた。しかし、おばあさんがお茶を飲もうとして、ちょっと膝をくずすと、火鉢の縁に手をかけて立ち、急に黙り込んでしまった。

赤々とおこった炭火が、目の前にあったからだった。

渚は食いいるように炭火を見つめていたかと思うと、ふいに手を伸ばしてそれをつかみに行った。

だれも止める暇もなかった。母が「あっ！」と声を出したときは、もう小さな手がヤカンをのせる五徳ごとくにからまって、五徳をさげたままの姿で立っていた。父があわててそれを振りほどいた瞬間、部屋じゅうをゆるがすような恐怖にかられた泣き声が響きわたり、たちまちにして家じゅうは大さわぎとなった。

渚は母にかかえられて、近所の医院につれてゆかれた。

手当てが早かったので、大事に至らず、このときは軽い火傷で終わったが、これでこの事件

がおさまったわけではなかった。

汀の目には、渚の手に巻かれている白いものが氣になつてしやうがなかった。

自分の手には何もしてないのに、渚の手には白いものがある。どうして渚だけあんなことをしてもらったんだろう、僕もほしいなあ、汀はそう思っていた。

母に聞いてみると、「ナギサちゃんは、おテテをやケドしたからホウタイしてるのよ」と言っていた。

汀には、やっと意味がわかった。

そうか、渚と同じことをやれば、白いものが巻いてもらえるのか、それならば僕もやってみよう。

渚が火傷をした日から二日たった夕方のこと、部屋の中には幼い渚と汀しかいなかった。二人は火鉢のそばで、落書きをして遊んでいた。渚は不慣れな左手をぎこちなく動かし、包帯をした手はポケットに入れていた。

汀は生来の左ききなので、渚の手の動きがおかしくて、渚の手をとって絵を描いてやっただけ。するとそのとき、ポケットにはいついた渚の白い手がにゅっと汀の眼前にあらわれたので、汀は急に白いものがほしくなり、渚の手を振りきって火鉢に向かった。

白い灰が厚く積もって、炭火はもう消えかかっていた。汀は考えていたことをさっそく実行

に移した。

手を伸ばして火をつかんでみると、それは汀の思いもしなかった感触だった。泣き叫ばずにはおれなかった。渚と同様に大声をあげたので、台所から母が飛んできた。

母は、五徳をさげて泣き叫ぶ汀を見て、一瞬茫然としていた。信じられないことが起こっていたからだった。

渚も、いっしょになって泣いていた。

先日走った医院へ、母はまたしても汀をかかえて急いだ。

医師は再び、渚がやったのかと思い込んでいたが、母のうしろに包帯を巻いた渚がくっついていたので、やっと意味がわかり、二人の連続した行為に驚いていた。

汀は、渚と同じ白い包帯を巻いてもらってさきほどまでの痛みも忘れて喜び、母が医師からしかられて涙ぐんでいるのを、浮かぬ顔をしてながめていた。

このように、二人はいっしょに生まれ、いっしょに生活していたので、どんなものであれ、異なったものはきらいであった。

食物にしろ、衣服にしろ、おもちゃにしろ、同じものでなければきげんが悪かったし、その点、両親や兄弟のみならず、近所の人たちも気をつかうことが多かった。同一のものでなければ二人とも拒否する力を最大に發揮して、ダダをこねた。

品物がよいとか、悪いとかの問題でなく、色や形が異なるのが問題であり、どんなりっぱな